

会議録

会議の名称	第2回加東市小中一貫教育研究会
開催日時	平成27年7月2日(木) 15時00分から16時41分まで
開催場所	加東市役所 2階 201大会議室
<p>議長の氏名 (委員長 浅野良一)</p> <p>出席及び欠席委員の氏名</p> <p>【出席委員】 12人</p> <p>浅野良一委員 土肥貴雄委員 尾崎高弘委員 木村裕司委員 小林美穂委員 上月浩忠委員 岸本吉博委員 黒崎泰則委員 眞海秀成委員 佐々木正利委員 小林喜代治委員 石田和伸委員</p> <p>【欠席委員】 1人</p> <p>大野裕己委員</p>	
<p>説明のため出席した者の職氏名</p> <p>【オブザーバー】</p> <p>大島巧男教育委員長 藤本洋二教育委員長職務代行者 神崎芳美教育委員 浅川るり教育委員</p>	
<p>出席した事務局職員の氏名及びその職名</p> <p>教育長 藤本謙造 教育部長 堀内千稔 教育総務課 課長 大橋博英 同 副課長 柴崎俊之 同 主幹 山本幸平 学校教育課 課長 登光広 同 副課長 平川真也</p>	
<p>議題、会議結果、会議の経過及び資料名</p> <p>【議題】</p> <p>(1) 視察結果について (2) 中間報告作成について</p> <p>【会議結果】</p> <p>(1) 視察結果について、意見交換を行いました。 (2) 「小中一貫教育研究会 研究報告書骨子」に基づき、審議しました。</p>	

【会議の経過】

1 開会

2 加東市連合PTA研修会について

「平成27年度加東市連合PTA研修会アンケート結果」に基づき、事務局から報告を行いました。質疑なし。

3 視察結果について

(委員)

今日、視察に行ったところがニュータウンの中にある学校で、説明では戸建て住宅が2,000戸ある地域の中での学校だった。一時的には生徒数が当然、増えるが、どこにもあるような少子・高齢化で減ってきて、小・中学校を存続できないような生徒数の減でいろいろ校区替えの話とかそんな話もあったようですし、存続できないというような状況の中で小中一貫という手法をとられたのかなど。だから、私のほうの印象は、そういう地域ですので、やはりその地域で何かを行っていかねばいけない、物事が起きたときには対応しなければいけないという、そういう強固な地域コミュニティというのはふだんからあったのかなど。だから、そういう小中連携、小中一貫校のことについても地域としてすぐに取り組めるような土壌というか、土台がしっかりしていたのかなというふう感じた。

(委員長)

あと、小中一貫をやって、こういったプラスがある、メリットがある、逆にこの辺、気になるぞというようなところは、何かございますか。

(委員)

実は昨日も教育振興計画の会議で、教育委員会のほうから自尊感情を醸成というかね、加東市としては教育上、取り組まなければいけない課題であるという話を聞いていた中で、子ども達の自信であるとか自尊感情というのが高まっているというのは校長先生も自信を持って言われていたし、あとは、特に小学校の高学年、そしてさらには中学校の2年生から3年生、この時期の成長というか、伸びが実感できると、教育者である先生が他校いろいろ学校を回っている中で、やっぱり小中一貫教育をやってきて、その伸びしろを本当に実感されてるなというふうな感じを受けた。それは非常にいいことだなと思った。

(委員長)

気になる点はありますか。

(委員)

気になる点は、やっぱり少子・高齢化で今後人口減少、これは避けられないと。人口減少が、そのベッドタウンの地域で2,000戸という限定された地域ですので、それはどのように減っていくのかというのが、ちょっとそこまでのデータももらっていないのでわからないんですけども、ただ、今現在が小学校、中学校、合わせて350人ということでしたので、この数というのが今、加東市内で検討されている東条地域の数よりも少ない。やはり子ども達、ある程度の人数で、私はある程度の人数の中で教育を受けるのがいいのかなど思ってる立場からしたときに、やはり9学年のうち

5学年が単学級であったという学校でしたので、今後、もし人数が減っていくとなれば今日行ったさつき野学園さんについてもちょっと課題なんだろうなというふうに感じた。

それと、あとはやはり親としてということでしたら、子ども達の中では部活動というのは中学校になったらやりたいし、こういうことをしたい、ああしたいというのはやっぱりあるんだろうなといった中で、部活のクラブ数が非常に少なかったのが、それもいろいろ課題になりましたという説明を聞いて、ちょっとその辺も課題なのかなというふうに感じた。

(委員)

一番感じたことは、非常に小さなコミュニティの中で、もともとあった小学校と中学校、もともとの施設を利用して今回小・中の施設一体型ということで中学校をつくられてましたので、もともとあった中学校は中学校の運動場があり、小学校は小学校の運動場があり、理科室は理科室、音楽室は音楽室というふうにそれぞれ2つずつあったということで、非常にやはり小学校1年生から中学校3年生まで同じ校舎で学ぶということで、どうしてもその運動場の使い方にしろ理科室、家庭科室、各専門の教室にしろ、やはり体格差もあり、激しさ、スピード等あったので、それが2つずつあるということは非常によかったんじゃないかと感じた。

それと、平成16年度より小中一貫の話が出てきて、最終的には24年度に開校されておるんですけども、やっぱり非常に地域の一体感というものが感じられて、最初から前向きにスムーズに小中一貫の話を進められていったと。その中でも地域を挙げて、地域、学校、保護者挙げて、一体型の学校にしていこうという意欲がもう一番最初からあったので、多分各段階踏んでいくのに、いろんな課題、山積、いろいろ出てきたんですけども、皆さんそれぞれに前向きに、これはデメリットだろうというのではなくて、こういうものもあればこうすればいいんじゃないかと、常に前向き、前向きに話し合いをされたというのを校長先生からお伺いした。

その中で、学校自体がやはり1年生から9年生、組織が大きくなるので、それを束ねるトップにいます校長先生、その方が初代の校長先生、非常にトップダウンで強く物が言える、非常にリーダーシップを強く持った校長先生が就任されたと、これはやはり非常に大事なことだと思った。

(委員長)

確か、橋でつながれて。子どもが行き来するわけですね。

(委員)

そうですね。校舎自体は小学校側の校舎側に1年生から9年生までの生徒さん、小学生1年生も中学校3年生も教室、クラス分けております。橋渡って、もともとあった中学校のほうに理科室とか音楽室とか、それぞれ専門の教室を設けられていかれているような感じでした。

(委員)

校長先生があまり大きい声では言ってなかったんですけども、さつき野台というニュータウン、地区の、もともとあった小学校と中学校が一貫校になったというのは、やっぱりその地域、その地区のニュータウンの一体感でなったんだろうけど、美原区全体だったらこんなうまくはいかなかったかもというのは言われていた。感銘したほうなんですけども、最初に2年かかってカリキュラムを決めても、その後、またやっぱり時間がたてばまた新しい課題が発生しても、それはそれでまたその中で、そのたびそのたびで改善されていくというのはよいことと思った。

(委員)

今日の堺の学校を見てきたんですけど、それぞれ既存の施設を利用した一体型という名前なんですけど、既存の施設を利用した形で、ちょっとほかとは違うなという感じはした。

子どもの数が多いときよりかなり減ってきて、空き教室がいっぱいあった。小学校の校舎も。だから、その空き校舎を中学校の普通教室にしてもまだ余ってるというそういう状態の中でされていた。中学校の校舎はもう特別教室だけということで、しかも使っていない教室がいっぱいあるんですね。もしあれを新しく一貫校を建ててやろうということになれば、あれだけの設備というのは多分難しいだろうなと、そういうふう感じた。

あと、地域のことも、この一貫教育を進めるにあたって校区の見直しとかもされたんだそうです。ところが、なかなかほかの地域からこっちへ通ってくるというようなことも検討されたようなんですが、それがなかなか難しくて今の現状になったようです。その辺の校区の見直しの難しさ、その辺も感じた。

(委員長)

ひとつの学校に中学生、小学生、小さい子がおるのを見て、何か印象、感想ありますか。

(委員)

ちょうど私たちが行ったときに中学生の7、8、9年生がいるんですけど、8、9年生の姿を見なかったんですよ、ほとんどね。小学校の子ばかり見たんで。一緒に活動しているところは全然見なかったんで、その辺が見れたらよかったなと思ったんですけど、3階に中学校の子がおりましたんで。ただ、小学校の校舎を使っていますので、中学校の子にしたら多分手洗い場にしろ、トイレにしろ、その辺の使いにくさはあるかなとは思ったんですが、先生にお聞きすると、いやそんなことはあまりないですよということでした。

(委員)

特に気がついた点は、一貫教育にするにあたって、その地盤というか、その地域の雰囲気ですね。それが割と、このままで放っておいたら他の学校と合併されるんじゃないかというふうな気持ちがあったんじゃないかと思った。ですから一貫校にするには、時期が一番よかったんじゃないかと思う。

それともう一つは、学校が、昔でいいますと東条西中学校、小学校のような形で挟んであって、あのとき東条西は何も道ありませんけども、その中に道がついているようなだけなんです。そういう形ですので、それを有効に使おうと思ったらすぐできるわけです。ですから、移動の手段だけなんです。一貫教育をするということになるということですが、このまま放っておいたらほかの学校と合併されると、そしたらもう一貫教育にしたほうが良いというふうな感じの印象を受けた。

それと、もうちょっと見たかったのは、高学年と低学年の交わりですね。そういうふうな行動を、どうしているかということを見たかったんですけども、今日は小学校ばかりずっと見ていまして、中学校は1クラスだけちょっと見ただけで、それも授業中ばかりでしたので、休み時間の行き来してるというのが全然なかったんです。

ですから、感想としては一貫教育については悪い印象は持ちませんでした。これはなかなかこれでいけてるなという感じは持ちましたけど。

(委員)

まず、私、この統合の背景というのは何ですかというふうな御質問をさせていただいたんですが、先ほど来、話がありましたように中学校の生徒数が減って、このままでは他のとこと統合されてしまうと、それが嫌なんで規模を大きくするために、小中一貫校を導入したんだということなんで、ちょっとある意味においては期待外れの部分があったんですけども。ただ、いろいろお話を伺う中で、成果としては中1ギャップの改善が非常に見られるということで、自尊感情の高揚というか、それよりもそれの以前ですけど、自己有用感とも言いますか、そういうものが芽生えてきているというようなところですね。それから、高学年の生徒が、下級生に対して規範意識といえますか、変なところを見せられないなというような思いなのか、荒れる子が非常に少ないと、これは土地柄もあるのかどうかわかりませんが、荒れる子が非常に少ないということをお話しされていた。

それから、父兄の方が小中一貫教育に対して期待をしてるということで、当初60%くらいが90%くらいまで、そういう期待が上がってるというような話をされていた。

部活ですが、5年生から一緒にやっているらしいんですけども、その5年生の子どもらが中学生のプレーなりを見て非常に憧れ感を抱いて一生懸命やられるというようなところがあるそうです。

先生のお話なんですけども、教員の方が9年間の教育システムということに対して理解を示されまして、積極的に取り組んでいかれているというようなことがあるそうです。

それから、小学生、中学生が運動会、一緒にやるんですけども、それぞれの役割を果たして、運動会が終わった後、非常に満足感を得てるというようなお話もあった。

校長先生のお話を伺っている中で、これが一番ポイントだなと思ったんですけども、校長先生が小中一貫校に対して教育を前向きにやられてリーダーシップをとっていると、まずこれが一番大事かなという気がするんですけども、そういうことを感じた。

(委員長)

校長は1人ですか。

(委員)

はい。前の校長先生、学校をつくる時の校長先生が非常に前向きにリーダーシップをとられたそうです。

(委員長)

課題のようなもの、気になる点みたいなもの、何かありますか。

(委員長)

課題を、今日、質問したんですけども、課題はないですねというお話なんで、本当かというようになったんですけども、あまりその課題については明確な答えがなかった。ですから、ある意味において我々でいろんな課題を見つけていって、それをクリアしないといけないのかなと。いろんな方から意見を伺う中で、課題というのは見えてくるんじゃないかなという気もしていますので、ある意味においては反対論者というのは、見方によってはそういう課題を問題提起しているのではないかなというような気もします。その辺を積極的に対応していくことが小中一貫校をうまくやっていけるかいけないかということにかかってくるんじゃないかなというような気もします。

(委員)

高学年、小学生の高学年、5、6年生が今だとリーダーシップを発揮して頑張っているんですが、小中一貫となったときにどうなるのかなというのがすごく気になっていた。実際、目で見ているわけではないですが、校長先生のお話を聞いていると5、6年生になって、縦割りの活動は1年生から6年生ですらしくて、その中でリーダーシップをとって活躍していたり、それから高学年、中学7年生、8年生、9年生の様子を見て自分もああいうふうになりたいということで、どんどんリーダーシップを発揮しているということを知らせてもらった。

それと、やっぱり9年間同じカリキュラムというか、一貫したカリキュラムで教育をされていて、一年一年を積み上げていかれるというか、そういうところがいいかなというふうに見ていて思った。

ただ、その辺のカリキュラムをつくっていくという段階で細かい打ち合わせがあったりとか、話し合いがあったりして、うまくいくためにはやはりその辺のところをきちんとしていけないといけないのかなと思ったり、それから先生サイドでいくと授業日数の持ち方というところでも時間数が違ったりとか、教科によって時間が違ったりすることがあるので、その辺をいろいろ考えているということを知っていたので、そういうところも考えていく必要があるかなというふうに思った。

施設の面では、うまく既存の施設を使われていていいなと思ったんですが、話の中で小学校の建設基準があって、家庭科室を小学校の基準に合わせたものをつくったんだけど、でも結局それは使わなくて中学校のもともとあったものを使っているということがあったので、その辺でちょっと無駄なこともあるのではないかなと思ったので、よく考えながらつくっていく必要があるかなということを知った。

(委員長)

小学校の授業ですが、先ほど、おっしゃった規範意識なんかは、そのあたりで何か特別なもの感じられましたか。

(委員)

際立ったところは特に感じなかったのですが、ただ小学校も中学校も同じようなルールで勉強していけるので、小学校の間はこうとか、中学校からこうとかということはなく、ずっと継続していかれるところがいいと思った。

(委員)

本当に何年も前から取り組んでおられますので、その積み重ねが今、教育の成果となってあらわれている学校だなというのは思った。特に一貫教育が行いやすい場所であったんだろうとは思いますが、その地域性があったりとか、子どもの数であったりとか、しやすい、だから、そうでなければできないとかではないんですけども、教育の条件整備が充実しているのを思った。施設は古いですけど、まず何が一番条件としてすごかったかという、350人規模で教職員が38人いるんです。なかなかこの辺ではそんな学校はなくて、それだけいたら指導も支援も十分できるなと思っていろいろと質問してきたんです。その状況についても聞いたんですけども、小学校、中学校が合体してるので、一貫校の基準と思うんです。本来は国が決めている定数ではそういうふうにはいかないんで、果たしてここでそういうことができるのかなという疑問もありますけども充実していると。あと、教材費にしても特別支援学級に置いてある教材とか、すごい充実していて子どもが本当に使って喜ぶんだけど、お金の面で買えないというようなことも、兵庫県ではなかなかできないんですけど、大阪府の特別支援、充実していたなと感心した。

それよりも何よりも、小・中連携ということで、中学生が子ども、小学生を連れて帰

るとか、そういうつながりがやっぱり一番あったので、そこが最大の良い面と思った。

課題のほうですが、先ほどから自尊感情が出ていますが、子どもの変容、小中一貫教育によってその自尊感情が向上したとおっしゃられたんですが、結局アンケートと思うので、子どもの自尊感情というものがアンケートによってその数字にあらわれて向上するものなのかなと私は思った。小中一貫教育をしたからではなくて、地域の協力があつてなんじゃないのかなと思ったんで。否定するものではないんですけども、自尊感情って、小学校へ行ったときに急に上がったりとかが下がったりするものじゃないんで、どうなのかなというのがあります。それを裏返すことではないですけど、こちらの学校とあまり変わらないのは、空き教室を見ていたんですけど、電気も付けっ放し、カーテンも開けっ放し、窓も開いているし、物も落ちているし、あまり変わらないという一面もありましたけど、何か軍隊のようにきっちりしてることを目指してるわけじゃないんで、という面があります。

それから、まず政令都市であり、そして350人規模であつて、私も一杯質問しました。制服が6年生まではあるし、修学旅行も6年生もしているし、結局あまり6・3制と変わらないんじゃないですかという意図で質問したんですけど、いやそうじゃないとおっしゃってなんですが、ちょっとそういう意味で、1,000人規模になったらこれをできるんでしょうかという答えはされてなかったんで、350人だからできるのかなという面もあるので、ちょっとその辺は参考にしにくい一面もあつたのかなというふうに思う。

あと、施設設備も小学校と中学校で不具合が出てくるんだろうなと思いつつ見てたんですけど、急に小さい子はトイレに行きたくなったりするので、大きい子が使っているところですから、それはうまく使わないだろうし、失敗もするだろうなという気がしました。

教職員の負担という面では、カリキュラムが本当に大変なんで、すごい工夫されてるなとは思つた。ただ、配慮事項とか、小中でどこまで共通理解ができるのかなという疑問が残つた。

(委員長)

職員室はどうなっていましたか。

(委員)

職員室は3つあるんですけど、職員会議は全員集まってされていますし、共通理解しているということは、おっしゃられていた。

(委員)

この委員になって本を購入したんですけども、やはり中学校の教師も乗り入れ授業であるとか、カリキュラムの編成において専門的な会議を中学校の教師が率先してやる中で、専門的な教科の伝達みたいな話が出て、中には中学校教師の負担が増えるんだという話がどの本にも書いてありましたので、今回も視察に向けて質問を出したんですけども、教職員の負担ということで答えが書いてあるんです。新しい小中一貫の取組みをするということで、教師の士気が上がっていますので、成果を上げるという部分と、それから上げないといけないという使命感がありますので教師も頑張るといふことで、頑張つて各地域で小中一貫が進められてるということなんですけども、ちょっとアンサーのところは何々だからできないのではなく、どうしたらできるかを検討したらということで、その回答の部分、教師の負担を軽減するために加配教員を配置するであるとか、小学校免許がない教員に対しても配慮が要るんじゃないかなという部分の具体的な回答を求めていたんですけども、どうしたらできるかということ

は、あなたが頑張ればできるよということで、結局教師の士気が高い部分と相まって、その負担をどう教師自身がやるという姿勢が、精神的な部分も含めてなんですけども、やっぱり頑張った部分、家庭にしわ寄せが行っているのか、その方で実際どこでやりくりをされてるかということで負担がたまったときに、やはり生徒や児童にそのしわ寄せが行かないような配慮っていうのは確実に必要ではないかなというふうに思った。そのトップダウンの校長先生の指揮のもとですけども、おまえが頑張ったらできるんやと、頑張れ頑張れということだけでは、子どもに対して負担が、しわ寄せが行ってるようでは困るので、そのあたり、制度的な対応なんかも必要ではないかなと思った。

(委員長)

確かに負担が増えるというのは事実といたしますからね。

(委員)

P T Aの研修会、6月20日の分ですけれども、高松第一の校長先生、小・中の校長先生も一体型はよいと。だけど、一体型じゃなかったらできないということもないと。総じて、一体型だからできるというふうなことも多いというふうな発言もあった。そういう意味で、施設一体型というふうな観点で今日は行かせていただいたんですが、今日の校長先生のほうも先ほど来から出ています学力向上に関すること、具体的には各教室でユニバーサルデザインというんですか、棚にカーテンを引いて、あるいは前の全面にはもうほとんど子ども達の視線がそこに向かないような配慮というふうなことが、小学校だけじゃなくて中学校も、見た範囲では学校全体でそういうふうなユニバーサルデザインができていたということ、それから自尊感情であるとか、総じて温和な生徒が多くなっているということ、つまり子どもの安定が図られているというふうなことが言われました。

一方で、今までの校舎を利用されているということで、ちょっと見かけたのは生徒が急ぎ足で自分たちの教室からもともと中学校のほうへ、特別教室のほうへ行っているというふうなことから考えても、やっぱり施設が一体的に全てそこでというのがいいのかなということ。

それから、教職員の意識として4月に人事異動で来た先生が、また、体調不良等でどうしてもという先生もおられるというふうな話もありました。これについては、やはり一部の学校で小中一貫というふうなことなので、そういうことも起こるのかな、市を挙げて加東市のようにされたら、そういうことも減るのかなということも思った。

また、もう一つは単学級であるということで、なかなか9年間で単学級ということになると学年が変わってもクラス替えがないということでは、ちょっと問題なのかなと、よっぽど縦の関係をしっかりしないとなかなか社会性の育成というのも難しいかなというふうなことも思った。

(委員)

私は小中一貫ということで、子どもに視点を当ててみようかなと思って行ってきた。内容的には、先日、高松第一小・中学校の校長先生、P T A会長さん、旧会長さんがおっしゃっていたことと共通する部分がありました。

1つは、小学生の場合、意欲と希望が向上しているというのと、それから小学生、自尊感情、自信と優しさが向上しているという、子どもの変容を校長先生のほうで話されました。これについては、加東市の課題となっているところでもありますので、この成果がそのまま、したことによってプラスになればなと思った。

あと、校長先生の話の中で、保護者の期待感の高まり、最初導入したときと今と比べて30%上がっているということで、かなり最初は少しいろんな不安もありながら進めていく中で、いろいろな課題もクリアしながら充実した教育がされているんじゃないかなと思った。

実際に、子どもの様子を見て、短時間だったんですけど、それはあまりわからなかったんですけど、ただ小学生の部分と、それから中学生の部分、中学生の部分は1クラスだけだったんですけど、落ちついた感じで授業を受けていらっしやったと。

成果はどうだったかという話の中で、精神的に8年生、9年生がかなり伸びると、他校に比べてと言われたので、その辺がすごくインパクトありましたね。

(委員長)

中2、中3ということですね。

(委員)

そうですね。あと、学力面で質問用紙の中の回答にあるんですけど、中学生になると学力面でかなり向上するという回答を得ておるんですけど、これは確かな学力をつけさせたいというのは、保護者、教師、全ての方が望むところで、やっぱりその精神的な成長っていうのが、子ども、小学生を指導していてわかるんですけど、友達関係とか人間関係がきちっとできておれば集中して学習に取り組めます。そうすると中学生になっても落ちついて学習できるという点から伸びる点、非常にプラスになるのかなと。

あと、乗り入れ授業で専門的な形で指導していただくという点で、それで伸びているのかなと感じました。これは感想なんですけども。

それから、あとシステム、大きな学校になってくるとどういうふうに教職員、共通理解なさっているのかなということが、気になっていたんですけども、職員会議の前にそれぞれの5つの部会があり、そこでしっかり練られて、学年、低、中、高学年部会でまだ練られて、そして職員会議というそういったシステムがあるのと、もう一つは資料見せてもらって、職員の数、多いなというのは感じた。これだけ多い職員を共通理解するのはどうするのかということでもちょっと疑問に思っていたんですけど、そういうシステムなんです。確立されてるという点で、ああなるほどかなと思った。

施設の面で、小学生仕様の形の部分が多かったので、中学生としては使いにくい部分も確かにあるんじゃないかと思いましたがけれど、これ一体型であればクリアできる問題かなと思った。

(委員長)

今、皆さんの意見をまとめていただいているので、ちょっと御説明いただけますか。

(事務局)

視察に行ってくださいました委員様方の意見を全てこちらに貼らせていただきました。カテゴリーとしては、先ほど、一番のメインは子どもの成長だということで、特に子どもの成長に関することを書いた。子どもの成長で成果といいますか、小学生から見た成果は、要は立派なお兄ちゃん、お姉ちゃんがいると、すごいということ憧れの目で見ると。中学生は逆に、そういった子たちにお兄ちゃん、お姉ちゃんと言われるわけだから、わかりやすい言葉でしっかりせなあかんというようなところで表情が穏やかになっているとかという精神的な安定ということがたくさん出ている。

課題の部分ですが、本当にきちっとできているのかというのが、子ども達の姿から

は今日は見れなかったので、そういったところが本当なのかなという課題が出ています。

その次、カリキュラム上の編成ですが、例えば授業の始まりを合わせるとか、この辺は工夫だろうかと思うんですが、9年間見通したカリキュラムをしっかりとつくっているの、要は先生方が最後の9年生の姿を見ながら1年生を教えるという、だから指導がぶれないと、そのカリキュラムづくりの話がたくさん出ていました。部活動の話も出ております。

その他はちょっと省かせていただいて、施設設備の話ですが、これは高松第一学園と違っていて、先ほど言ったように空き教室がたくさんあったので、その活用についてどうなのかというような課題が書かれていた。逆に言えば運動場が2つあるし、プールも2つあるしという恵まれた部分もあると。

あと、教職員に関係することで組織の話なんですけども、先ほど委員がおっしゃった、要は組織をまとめるために、しっかり会を作るとかという組織づくりをしっかりとされている。だから、教員の共通理解が図れているというような話。

あと、課題としては、教員の持ち時間数であるとか、実際に負担度がどうなるのかという、視察校は2校が1校になっていますので、当然、児童・生徒数に比べたら教職員の数が多いので、それでもこれぐらいの負担があるのかなと。そしたら、今の定数上でいけばこんなことになるだろうというような不安を課題として書かれている方がいらっしゃいました。

(委員長)

小中一貫で世に言われている成果と課題というのは、つかんでるなという感じですね。やはり、最後、事務局がおっしゃったように、小学生、あるいは中学生、それぞれにメリットがあると。特に、中1ギャップについて、かなり強調されていたというのは間違いなしなので、かなりみるみる成果があつて、かつ、自尊感情ですか、規範意識ですね、そういったものがかなり強くして、数字でつかんでるわけじゃありませんけども、前の高松第一の話在先ほどもしていただいております。

ただ、課題、今日はまだまだ見れなかったところありますが、まずひとついえるのは、先ほど御指摘もあったようにやっぱり新しいカリキュラムをつくったり、いろいろ乗り入れをしたりするということで、やはり教職員の負担がかなり増えるのは、これはまず間違いはないかなと思う。ですから、その負担が、先ほどもお話にもありましたように、頑張りで何とかせえやというんじゃないでね、やっぱり委員会としてバックアップして、そのしわ寄せが教員に行くなら、子ども達の教育や、あるいは家庭のしわ寄せにならないようにやっていかないといけない。だから、要するにその辺の、教育委員会がひと踏ん張りしないといけないという部分が明らかにあるようでございます。

それで、今、まとめていただきましたので、ちょっと10分弱ですね、休憩をとりまして、是非皆さんに見ていただくということで時間とりたいと思う。そしてそのあたりを今後、中間報告に向けてどうまとめていくかについては、休憩後にもう一回再開して進めていきたいと思っております。

[休憩] (午後3時55分～午後4時05分)

4 中間報告作成について

「小中一貫教育研究会 研究報告書骨子」に基づき、事務局から説明を行いました。

(委員長)

今まで、今までというか、全体、今回の議論、それから今日の印象からすると、何か小中一貫をするにあたっての致命的な瑕疵みたいなものですね、それは感じられないというふうに理解している。

ですから、どうでしょう。ちょっと、これは私からの提案ですが、この後の取組みの方向性としては、小中一貫を推進しようというようなことで書いていくと。ただ、気になる点が多分、今日気づかない点も結構あると思うんですよ。それをなるべく細かく出しときたいんですよ。それで、その取組みの際の留意事項というところにそういった課題のようなものを整理して出しまして、やはり附帯事項でもないですが、前向きに推進していくんですけども、その課題の解決に向けて教育委員会のほうで人的、物的、資金的にそういったバックアップは不可欠であるというようなところを附帯事項として書き込みたいなという気がします。だから、進めるんだけど、ただし、ちゃんとやろうやということですね。ですから、そういう意味で今の、今日のお話からすると、致命的な欠陥がどうもないようでございますので、小中一貫というのはやったほうがいいんじゃないかなという結論になるのではないかなと思うんですね。そのあたり、皆さん、いかがでしょうか。この趣旨、小中一貫の善し悪しというんですかね、それについてお考えをお聞きするんですが、教育長のほうでも前向きに考えたいというお話もありましたんで、そこらについてまずお考え、よかろうという、そういうふうな判断、どうでしょうかね、よろしいですかね。

それでは、提言の、取組みの方向性としては、そういったことで、是として進めるというふうにしたいと思います。

ただ、(2)にあります取組の際の留意事項ですね、これにつきましては、今日も先ほど教職員の負担ですとか、他にもいくつか出ております。ですから、事務局、また後でももちろん結構なんですけど、今日見て気づいた、これ思ったということ、あげていただくと取組みの中身に非常に役に立つと思いますので、いかがでしょうか。どんなことでも結構です。例えば、多分加東市でやるならスクールバスを使うんじゃないですか、バスですね、バス通。バス通というのは、意外と難しいですよ。それで、本当に子ども専用のバスにするのか、市民バスを兼ねるのとか、あるいはこれ他の学校で聞いたんですが、スクールバスですね、インフルエンザなんか流行ると、すぐ流行りますからね。すぐ、皆かかっちゃいますのでね。そういったバス一つにしてもいろいろある。あるいは、校章とか校歌とか、そういったものどうするかとか、かなりいろいろあると思うんです。ですから、それを今日全部洗いざらい出せるということはないと思いますが、皆さんの個人的なお考えで、これだけは何とか言っておきたいと、これだけは何とか対応策を今から考えないと間に合わんとかというふうな、これをちょっとお出しいただけますでしょうか。どなたからでも結構なんで、言っていただければと思います。

(委員)

今考えられる課題として、やっぱり先生方の講数ですね。これが何か大幅に増えないかなというのが。例えば会議があるとか、何とかがあるとかということで、先生方が大変にならないかなということで。そういうときに往々にして、精神論的にね、あんたら頑張らないかんねんとかということだけじゃなくて、やはり組織的に、システムというのか、そういう部分できちっとすくい上げていって、この小中一貫校を先生方にやっていただくというようなことをできる限りこの会で見出していって、対応を

考えていけないといけないのかなという気がします。

(委員長)

ほか、何かございましたら。大きなことでも小さなことでも結構なんで、気になる点という感じですかね。見た範囲で、見聞きした範囲、あるいは自分が想像する範囲でありましたら。

例えば、部活なんか5年生から一緒だと、かなり顧問の先生、気遣うんじゃないんですか。中1でもまだまだ小さいのに、そういう小さい子が一緒に部活をするというのはいかがなものか、いろいろ不安あると思いますが、何かありますか。

(委員)

部活動については、中学校の教師も課題にあげてる点で、実際に自分が学生のときにやっていたスポーツでない部活動を指導しないといけない、顧問として持たなければいけない。だから、教師になってから初めてルールブックを開く教師が最近増える中で、その顧問自身が小学生も一緒に指導すると。結構、運動能力的な部分と身長、体重の部分とは反比例している部分があるように聞いて、体のつくりは大きくなってらるんだけど、能力的には低い、小学生にどういうトレーニングであるとか、どういう目的を持たせたら参加をさせるのかというのは、実は中学校の教師は知らないですよ。だから、すぐに今までの様子で小学生に対応するのはちょっと、危険であるという部分も含めて部活動に関しての小学生の参加というのは、慎重にしていってほしいものだろうなというふうには考える。

(委員)

私はカリキュラムづくりが、やっぱり難しいとは思いますが、それを具体的にどうやって今まで小中一貫をされているところがやられているのか、それを勉強したいなと、知りたいなというふうに思う。

(委員長)

具体的に言うと、教員が音頭とってつくるのか、あるいは教育委員会のほうで提供してくれるのか、そういうことですか。

(委員)

そういうこともですし、まず何から始めたらいいのかというあたりも。

(委員)

子どもに関して言いますと、一番子どもに関して小中一貫するメリットを我々は目指して取り組みをして、やっていくわけですが、一つの目標に向かって教職員が共通理解をする際に引かかってくるのは、やっぱり小学校と中学校の指導の違いが一番あげられるのかなと。共通理解すればいいことなだけで、共通理解というのは同じスタンスでやらないといけませんので、じゃあ小学校1年生と中学3年生はどうするんかというようなことになるし、それも踏まえて指導をまとめていったらいいと思うんですが、そんなことは今までにやってきてますし、できると思いますけども、同じ校舎の中にあるわけだから、それを小さい子が見て、大きい中学生に指導してもらおう先生を見て、小学校のほうはどう思うのかとか、その違いは徹底してなければ一貫して教育できないという気がします。

あと定数。定数も、要するに小学校と中学校が合体するから教職員も倍になる、足した数だけなるというわけじゃないので、例えば特別支援なんかは今だったら2つの学校でそれぞれ学級数の人数、教職員がいるんだけど、小・中という区切りをつけられてしまったら1つのクラスに8人以上にならない学級は教職員が減るわけですから、そういうところをどういうふうな埋め合わせをしていくのかということもありま

すし、先ほど言われましたスクールバスなんかも費用をどうするのか、給食費の滞納とかも結構ありますので、そういう課題もあるし、教職員はある程度、頑張ろうとは思っていますので、もうあれやこれや言っても仕方がないと思うんですけど、足並みがそろそろようなものをやはりつくらないといけないというのが、今一番の頑張らないといけないことかなと思っている。

(委員)

全体の話は別にして、一つ気になることがあるのは、実際、子育て世代の私たち、また私たちよりももっと若い、若い世代のお父さん、お母さんたちが、この小中一貫の話、これだけ加東市内で新聞紙面にもいろんな連Pからの情報提供にしても、かなりこの春先から大分宣伝しているんですけども、なかなかまだ皆さん、関心が非常に低いと。例えば、前回研修会させていただいた件なんですけども、全体で参加者128名でございますが、実際には連Pとしては加東市内の全学校、PTA会員様に全ての個人個人、約2,600名ぐらいの会員数あって、自由に参加してくださいという形で案内紙を配布させてもらったんですけども、結局一般から参加してもらった保護者、お父さん、お母さんというのは、ほぼゼロです。結局、この集まった人数というのは正直なところ、各連合PTAからPTAの役員さんが出席されてるといった現状ありますので、私たち保護者代表としては、これからもっともっと役員ではないような、加東市内在住されてる本当に子育てを實際されているお父さん、お母さんに、もっともっと中に入ってもらって意見を集めたいと思っております。

(委員)

保護者としては、よりよい学校ができることを願うだけで、例えば教職員の定数であるとかというのは一般のほうではわかりかねる部分がありますので、ただただその点を願うしかできないのかなというのが正直なところですよ。

(委員長)

そういういい学校というか、どういう学校というのを見えるようにしてほしいですよ。どういうふうにするのかというね。

(委員)

先ほどの感想の中にもあったんですけども、やはり親としては、子ども達にしっかりした学力をつけたいと、これがやっぱり一番大前提になるのかなと、そのために何がいいのかっていうところではないのかなと。前の会議でもお話しさせていただきましたんですけども、教科担任制がいいと、アンケートの中でですね。やっぱり、それについては7割を超える。だけど、全体がわからないのでわからないということで、やはりそういう子ども達の学力を上げるため、確かな学力をつけるために何かなりそうやなということについては、非常に賛同を得られているから、そんな中でやはり私も十何年間、学校の先生方とつき合いをさせてもらってる中で、子ども達が元気で学校で暮らせる、そうするには、そうあってもらいたいと願うからには、やはり先生が学校で窮屈ではだめなんだろうなと。だから、私は先生とつき合いをする中で先生が窮屈にならないように、もっともっと先生方、相当のポテンシャルを持っていらっしゃるの、それを発揮していただけるように保護者としてどれだけ協力といいますか、応援といいますかね、できるのかなと。

そういうことをするための処方として小中一貫があるならば、それは大いに当然進めることであろうと思えますし、こういう立場になってから小中一貫教育について、いろいろ調べたりもしたんですけども、やはり地域の課題として、本当に地域がいろいろ考え始めたときに、学校は地域に大切にしてもらえるんやというようなことも本の中に書いてもありましたし、実際そうなんだろうなと。

戦争のときに、空襲とかがあったということで、疎開先ということでいろいろと受け入れてたということで、それで本堂とか寺を使っているいろいろと町の子も当然地元の子も一緒に勉強をした。それをさかのぼると寺子屋ということになるのかなと。

そういうところで、やっぱり地域で子ども達は育っていたし、私たちも小さいときは地域で、今でいいましたらまちづくり協議会とかという言い方をしてますけども、そんなこと言われなくても地域の活動に参加して、いろいろ育てられたということがあって、それが何か学校制になって、学校に任せとけばいいんだと。親は学校に物を言う、地域は学校に物を言う。そうじゃなくて、ちょっと何かそういうのを考える、学校と地域と親も含めて一緒に考える、そういうシステム、機会というか、システムの中で小中一貫教育に取り組めれば非常にいいんだろうなというふうには思っております。

(委員)

この小中一貫教育なんですけど、一番しやすいのは多分、一体型の学校が一番しやすいかと思う。その次に隣接型。離れてる場合が一番いろいろやるにあたって課題も多くなってくると思うんですが、今、加東市が目指されているのは一体型か、それか隣接型になるんですが、地域によっては一体型にしよ、隣接型にしよ、即、今現在ある学校の数が物すごく減ってしまう地域もあるんですね。そういう地域のことを考えた場合に、例えば学校オープンとか、小学校よくやっていますけど、本当にすぐ近くにある学校であれば多くの住民も見に行こうとか、そういうこともあると思うんですが、それが広がってしまうとそういう地域の住民とのかかわりが薄くなってしまわないかなと、そういう懸念が考えられる。その辺をどういうふうにして地域とのつながりを保ちながらやっていくかっていうのが、1つの課題になってくるんじゃないかなと思いますね。

離れた学校で小中一貫教育やるのは、確かに難しいと思うんですけど、全国的にいうとそういう例もないわけでもないんですが、そういうやり方だとやっぱりだめなんだろうかなという、その辺の検討もされたほうがいいんじゃないかなと。はじめから一体型ないしは併設型っていうことで考えてますけど、そういう方法も一つの選択肢としてはあると思うんですが、その辺の検討もしたらどうかと思う。

(委員)

1つは、もう先ほど出ていましたけどもクラブ活動ですね。中学生の方と小学校5年生、6年生、一緒にするということなんですけれども、それはいいとして、今度は通学なんです。中学校が遅くまでやって、一生懸命やってる。それで遠距離になりますんで、そういうところがちょっと疑問に思います。

それともう1つは、我々こうやっているとろいろ話をしとるんですけども、実際にその場にたって、受けるのは生徒・児童です。その子ども達が、この学校に行って楽しいと言えるようなそういうシステムづくり、また環境づくりということですね。そこが一つの問題じゃないかと思う。そのためには、ちょっと留意事項になるんですけども、学校、地域、親、こういう三位一体でのこういう人たちが、やっぱり同じ気持ちで盛り上げていく、そういうことが大事じゃないかと思う。だから、今日、視察に行きました学校は、もうせっぱ詰まってみんながやらなあかんと、よし、こうやろうというような気持ちで一つになって、盛り上がってきたと、そういうものがあつたからできたと思うんですよ。それと人数が少ないのでね。だけど、今の加東市でやろうとしていることは、ましてそのような形をとっていきたいということがあると思うんです。だから、主体は子ども達ということ、これを忘れないでこの事業を進めていただきたいと私は思います。

(委員)

皆さん言われたように、一番難しいなと思うのは、教職員の意識の統一、小と中の意識をいかに統一していくかということだと思う。カリキュラムであるとか、生徒指導上のことであるとか、いろいろ小と中と教職員の考え方っていうのもいくらか違うだろうし、カリキュラムにあたっては小学校は担任制をとってますので、1時間目から5時間目ないし6時間目までということになるだろうし、中学校の場合は大体週に20時間から22時間ぐらいだと思いますので、空き時間があってということになると思いますので、そのところからしてもまた違うだろうし、会議の持ち方っていうのも違うだろうと思います。そういう意味でいったら、小学校を卒業するときとか、中学校3年間というのではなくて、義務教育を修了してっていうのから、それでもいいですし、このような人間を育てたいと、このような人間を社会に送り出すには、最低限義務教育の段階でこういう子ども達を育てたいというところで小と中の先生方が意識をともにするというんですか、そういうふうなことが話し合わなければならないのかなというふうにも思ったりもする。

それから、今日見させてもらった堺市のほうは部活動は5年生からということでしたが、私が知る限りでは中学校からということも多いと聞いている。やはり、原則は、中学校からかなというふうにも思う。今日、見させてもらった学校は、非常に人数も少なくて単学級が多かったというふうなこともあるので、部活動、これ以上貧弱っていうんですか、構成している生徒が少なくなるっていうこともあって、5年生からということだったと思うんですが、やはり中1からというのが原則にされたらどうかなと思う。委員のほうからも中学校で部活動でなかなか自分がやってきた部活動以外のものを持つというのがあるというふうなことではしたが、確かにそのとおりだと思う。

そういう意味では、小学校の先生の中に必ずということではなくて、部活動をしたいという先生方もおられると思いますので、希望をとって、希望でこの部活動やったら指導の補助をすとか、あるいは自分が主体的にやるとか、そういう先生方もおられてもいいんじゃないかな。そうすることで、小中一貫のより効果が出るのかなとも思ったりもする。

また、小中一貫で地域が広がったら、より地域の子どもは地域で育てるっていうんですか、そういう意識を持っていただくというんですか。偉そうなことを言いますが、例えば地域でいろんな行事をされてると思うんですが、中学生に何か役割を与えとか、小学生に小学生なりの役割を与えとかということをしていろいろされてると思うんですが、よりそういうふうなことを意識していただいてというのも一つ地域の活性化になるのかなと。

学区が広がれば、もっといえば近接した地域の祭りにも別の地域から友達になったら、校区が広がればその子どもも友達ということで来れるわけですから、そういう子ども達も巻き込んですれば、決して地域にとってもマイナス面ばかりではないのかなというふうなことも思ったりもする。

(委員)

いろいろと出ておるんですけど、まず1つ目は小中一貫校を設立するに当たっての地域の協力は絶対必要です。いろいろな方にお聞きしておりますと、今までのものが全てなくなってしまうという意識が非常に強い方がいらっしゃいます。ただ、子ども達がどうだということに視点をあてない限り進まないかなと思います。その辺が一つ大きな課題で、実際に地域で運動会とか行事をなさってるところがありますので、地域間交流によって、うちやったら、ああいう方法でもできるんじゃないかという、そういう地域の交流ができたかなと思ったりもします。それが1点。

それからもう一つは、実際に進めるにあたって課題として大きく上げられてきておるのは、今日も資料の中にありましたけれど、教員の負担が増えるのは事実ですと書いてあります。負担がどういう面が負担で、どんな項目があるのか、それを軽減するためにこういう手法でこうしたらいよというのをしっかりと整理しておけば、スムーズにいくのかなと思ったりするんですよね。そこがポイントの一つでもあるのかなと感じております。

すべての子ども達のためということを進めていけば、校長先生おっしゃってましたけど、クリアできると、乗り越えられるんじゃないかなという話でしたので、その辺の細かい研究がもう少し必要かなと思います。

(委員長)

いろいろ、お話を聞いておまして、やっぱり最大の課題は責任の所在なんでしょうね。ですから、基本的な考え方という部分に、今、現状と課題、目的、視点、これまでの取組とありますが、目指す成果は入れるべきと思いますね。ですから、今日も保護者のほうから期待がという話がありました。あるいは規範意識だとか、いろいろ中1ギャップですとか、最後のほうに出てきたのは、地域との関係が薄くなっちゃうとか、そうじゃなくて、これをきっかけにもっとさらにもっとするんだとか、そういう目指す成果というのを掲げることで、教育委員会の責任の所在をはっきりさせるためになるんじゃないかなというふうに思う。ですから、いきなりその成果に至らないということであれば、やっぱり3年、5年の計画で、目指して、やる。ただ、やっていくよりも、やはり成果を目指してやると、できないときには、やはりそれを見極めるということですかね。ですから、今いろんな課題が出ておりますが、当然、その成果を出すためには、その課題をクリアしないと、成果に到達できませんので、自然の成り行きでいくわけじゃありませんから、そういう意味でたくさん課題を、あらかじめ事前に予測して、そして取り組んでいくという姿勢が大事ではないかなと思いました。ぜひ、骨子案の基本的な考え方の中に1項目起こしていただきたいなという気がしますね。

以上、今日お話ししてまいりました中で、視察には委員の意見、そういったものからいただき、研究報告の骨子として案が出てまいりました。別途、する方向でやるわけですが、課題について丁寧に拾い出し、それをしっかりした方策を今後、考えていくということです。

5 閉会

6 事務連絡

【資料名】

小中一貫教育研究会 研究報告書骨子

高松第一学園小中一貫教育概要

平成27年度加東市連合PTA研修会アンケート結果

平成27年8月21日